植民地日本語新聞の事業活動
―大連・満洲日日新聞社による「在満児童母国見学団」をめぐって―

栄　　元

総合研究大学院大学　文化科学研究科　国際日本研究専攻

1907年11月3日に関東州租借地の大連で創刊された『満洲日日新聞』（以下『満日』と略す）は、大連を中心とする中国東北地方における最大規模の日本語新聞として1945年まで発行され、同紙約40年間の発行期間は日本の満洲経営の期間とほぼ一致している。同紙には、大連を中心とした満洲の日本人及び中国人社会の動向に関する記事が多岐にわたって掲載されており、さらに、日本国内のメディアでは得ることの出来ない情報も多く含まれている点も特徴である。

創刊当初から「満洲経営の急先鋒」と自ら誇る満洲日日新聞社（以下は満日社と略す）は、「満蒙大陸の文化的開発を中心の目的として東亜全局の精神的並に物質的発達を企図し、助長し、新聞紙としての天職と使命を全ふせんとする」という方針の下で、紙面編集に限らず、『満洲十年史』、『南満洲写真大観』、『沿線写真帖』、『満蒙全書』などを出版し、「頭彩（1等賞）は何番か」などの予想投票のほか、「お正月の歌留多会」、「学術講演会」、「日中記者大会」、「飛行機展覧会」、「連合艦隊便乗見学」、「満洲児童の母国見学」など、各種のイベント事業にも積極的に取り組んだ。当時中国東北地域の中で広く読まれたという性質上、租借地という特別な環境下で行われたこれらの事業の持つ影響力の及ぶ範囲が推測できるだろう。

そのアプローチの一つとして、本稿では、満日社が主催し1920年から1925年にかけて継続的に組織された「在満児童母国見学団」に焦点をあてて、『満日』の紙面記事と照合し、その実施趣旨、実態及び成果を概観した上で、満日社が、日本大陸政策を推進するために、如何に植民政策を支えていたのかについて検討することを目的とする。また、同時に植民地における新聞社事業のもつ意味についても考察する。

キーワード：在満児童母国見学団、『満洲日日新聞』、満洲日日新聞社、事業活動、租借地都市大連

はじめに
1. 見学団派遣に至るまでの経緯と1920年代における関東州と満鉄附属地の交通環境
1.1 見学団派遣に至るまでの経緯
1.2 関東州における交通状況：「日本―朝鮮―満洲」交通網の形成
1.3 先行研究について
2. 『満日』紙上に見られる見学団
2.1 社告に見る見学団の実施趣旨：植民地経営の人材育成
2.2 見学団に対する期待―教育関係者からのメッセージ
2.3 出発前の準備
2.3.1 見学団員の選抜
2.3.2 旅費
2.3.3 見学団歌「東洋平和に捧げんと」と団章
2.4 出発当日の光景
2.5 母国見学の実態
2.5.1 見学都市及び場所
2.5.2 見学団への特典―日本初小学生の宮城拝観
2.5.3 見学都市における小学校との交流
3. 感想文からみた見学成果：日本人としてのアイデンティティー及び満洲宣伝
4. 結びにかえて―植民地経営協力者としての満日社

はじめに

日露戦争後、日本はポーツマス条約によって、関東州租借地および満鉄附属地を獲得し、そこを中国大陸進出の足がかりとして大陸政策を積極的に進めた。それに伴い、経済・政治の中心都市も営口から次第に大連へと移動していった。1907年4月、南満洲鉄道株式会社（以下「満鉄」と略す）の本社が大連に設立された。以来、大連は満鉄による満洲経営の基盤となると同時に、在住日本人も急増した。大連は、在満日本人の密集都市であるだけに、当地における日本語新聞の需要も一段と大きいものとなった。

一方、満鉄初代総裁に就任した後藤新平は、鉄道のほか新聞、印刷、教育、文化事業に当初から強い関心を示していた。このようにして、満鉄は「満洲ノ開発ニ資スルト同時ニ会社事業ノ機関タラシムル目的を以」[1] て、1907年11月3日に大連で機関紙『満洲日日新聞』（以下『満日』と略す）を創刊した。

『満日』は、大連を中心とする中国東北地方（満洲）における最大規模の日本語新聞として1945年まで発行され、約40年間の発行期間は日本の満洲経営の期間とほぼ一致している。同紙には、大連を中心とした満洲の日本人及び中国人社会の動向に関する記事が多岐にわたって掲載されており、日本国内のメディアでは得ることの出来ない情報も多く含まれている点も特徴である[2]。

創刊当初から「満洲経営の急先鋒」、「日清両国の（中略）提携相護の啓発」[3] と自ら誇る満洲日日新聞社（以下満日社と略す）は、「満蒙大陸の文化的開発を中心の目的として東亜全局の精神的並に物質的発達を企図し、助長し、新聞紙としての天職と使命を全ふせんとする」[4] という方針の下で、紙面編集に限らず、『安重根事件公判速記録』（1910年）、『南満洲写真大観』（1911年）、『沿線写真帖』（1912年）、『満蒙全書』（1927年）などを出版し、「頭彩（1等賞）は何番か」などの彩票（宝くじ）予想投票のほか、「お正月の歌留多会」、「学術講演会」、「日中記者大会」、「飛行機展覧会」、「連合艦隊便乗見学」、「満洲児童の母国見学」など、各種のイベント事業にも積極的に取り組んだ[5]。租借地という特別な環境であるからこそ、これらの事業の持つ影響力が更に大きくなると考えられる。また、これらの文

化事業の実態を明確することにより、租借地大連の日本人社会・文化の世相や動向の一側面が究明できると思われる。

ところが、この点に関しては、これまで植民地研究史、文化史のみならず、メディア研究史においてもさほど注目されてこなかった。確かに、植民地メディア史の分野において、戦前の日本が海外支配地で展開した新聞・ラジオ政策に関する諸課題に関しては、いくばくかの研究蓄積がある。例えば、李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』（凱風社、2000年）、李承機『台湾近代メディア史研究序説―植民地とメディア』（東京大学博士論文、2006年7月授与）、貴志俊彦・川島真・孫安石『戦争・メディア・ラジオ』（勉誠社、2006年）などがある。その中で『満日』を取り巻く先駆的な研究としては李相哲の『満洲における日本人経営新聞の歴史』が挙げられる。

李氏の研究は1905年に営口で最初の日本語新聞『満洲日報』が創刊されて以来、1945年の敗戦までに満洲で刊行された日本人経営の日刊新聞について、日中両国に保存された史料を駆使することで旧満洲の主要な日本語新聞の変遷、編集者の顔ぶれ、満鉄の新聞業参入、関東軍による言論統制などについて考察したものである。また満鉄経営の『満日』を中心に、その約40年間の社説を分析し、その論調から日本の大陸政策と世論の動向を読み解いている。これは現在までの『満日』に関わる研究の中で最も信頼性が高い成果であるといえる。しかしながら、その研究では、考察対象である『満日』について新聞経営における満鉄側の深い関与が指摘されているものの、日本の大陸政策を推進するために、いかなる経営戦略をとったのかという問題についての分析は行われていない[6]。

つまり、先行研究の多くは、『満日』を一次資料として、特定時期の新聞記事内容を分析することに留まっている。また、満日社が日本の大陸政策を推進するために、植民地統治の1つの手段として如何に植民政策を支えていたのか、という点に関する検討は、まだ十分とは言えない[7]。換言すれば、満洲新聞史に関しては、まだ本格的な研究はなされていないと言えるであろう。

また、『満日』は大連で刊行された定期刊行物の中ではほぼ完全な状態で保存されている。この意味で『満日』は、日本の満洲経営、あるいはこの時期の中国東北地域社会の実態を解明する上で、高い史料的価値を持つものである。

一方、近年、メディア・イベントという視角から日本における新聞社が主催したイベントを取り上げたものの1つに津金澤聡廣を代表として刊行された「マス・メディア事業史研究会」の一連の論文集が挙げられる[8]。その中では満洲事変前後において『大阪朝日新聞』、『東京朝日新聞』、『名古屋新聞』が主催した満蒙に関するイベント[9]について論じられているが、いずれも日本国内の新聞社に焦点があてられており、植民地における新聞社が主催したイベントについての言及はほとんどない。

これらの点から総合的に判断すると、『満日』及び満日社の事業活動に関する再検討は、租借地都市大連社会における満日社の機能、さらに日本の植民地統治の一側面を理解するうえで大変重要なものであると考えられる。

そこで、本稿では、1920年から1925年にかけて全6回にわたり満日社が主催した「在満児童母国見学団」（以下見学団と略す）に注目することで、満日社が日本の大陸政策の推進また植民地政策において担った役割を考察したい。

まず最初に、見学団派遣に至るまでの経緯を、当時の時代背景について触れながら概説し、また、先行研究についても検討する。

1. 見学団派遣に至るまでの経緯と1920年代における関東州と満鉄附属地の交通環境

1.1　見学団派遣に至るまでの経緯

1905年9月5日にポーツマスで日露講和条約が締結され日露戦争は終結した。日本は旅順・大

連を含む関東州の租借権、満鉄附属地などの諸権益をロシアから獲得した。それ以来、関東州への日本人の自由渡航が認められるようになったため、渡航者は増え学齢児童も増加し、各地に小学校が設置された。

満洲に設立された日本人学校は、関東都督府が管轄する関東州の学校、満鉄が管轄する満鉄附属地の学校、領事館が管轄する区域の学校の3種に分かれており、政治や外交においては関東都督府（のち関東庁）と満鉄と領事館という「三頭政治」が学校運営の管轄にも見られた[10]。このうち、領事館管轄の学校（ハルビン、吉林、鄭家屯など）は満鉄から補助金を受給しており、学校運営面でも満鉄の影響が強かった[11]。言い換えれば、満洲の日本人の教育はほぼ関東都督府（のち関東庁）もしくは満鉄の監督のもとにあった。

管轄機関の相違は教育方針にも反映されていた。関東州の学校においては日本国内の学校教育をそのまま行う「内地延長主義」[12] 教育の色彩が強かった。これに対して満鉄附属地の学校においては、満洲事情を取り入れた「現地適応主義」教育の傾向が強かった[13]。ただし2つの教育政策は相容れないものではなく、基本は内地の教育をそのまま移入したような「内地延長主義」教育が主流を占めていた。

1914年、第1次世界大戦が始まった。当時、日本は、日清、日露の2つの戦争の戦勝国として、台湾、朝鮮、満洲などを支配し、一気に経済発展を遂げ、世界の大国の仲間入りを果たしたことで、ますます大国意識をもつようになっていた。大戦中の1915年に、日本は中国に対して高圧的な「21か条要求」を突きつけ、山東半島や南満洲に大きな利権を獲得した。「対華21か条」により関東州の租借権および満鉄の権益期限の延長が実現し、満洲での長期在住ないし永住が現実的なものとして現地及び内地に広く認識されるようになった[14]。そして、内地における満洲への興味関心も高まっていった[15]。しかし一方で、中国人の反日感情が高まり、中国各地において「対華21か条」に抗議する排日運動が相次いで起こった。同時に、中国側は一連の排日措置を打ち出し、日本人の中国国内での経済活動を厳しく制限した。全国的な日貨排斥運動による日本の経済的損失は大きく、大戦終結後、特に1919年の5・4学生運動以降、日本の対中国貿易は停滞した[16]。その影響は、満洲にも波及した。満洲の好景気は終焉を迎え、日本人人口の増加率も次第に低下した[17]。それはそのまま日本人の社会的・経済的影響力の縮小につながる。一方、学校では満洲生まれの生徒が内地生まれの生徒を上回るようになり、内地への帰属意識の希薄化が進むなど、生徒らの意識も大きく変化していくこととなった。

こうした状況の下、満洲の統治者から満洲における教育について改革の要請が在満教育関係者に出された。これ以降、「内地延長主義」教育の傾向が強かった関東州の教育界にも満洲の特殊性に根ざした教育を行う必要性を認める意見が強くなっていくこととなる[18]。

1915年には満鉄附属地の教育に関する一大指針として以下のような「附属地小学校児童訓練要目」が制定された。

「附属地小学校児童訓練要目」[19]

第一、我国体ノ尊厳ナル所以ヲ会得セシメ国民道徳ノ涵養ニ力ムヘシ

第二、身体ト精神トヲ鍛錬シ剛健ナル気象（ママ）ヲ養ハシムヘシ

第三、帝国ノ地位ヲ了解セシメ土地ト相親ムノ念ヲ養ヒ質素ニ安ンシ勤労ヲ楽マシムヘシ

第四、同胞互ニ和親共同シ国威ノ発揚ヲ期セシムヘシ

第五、日本国民タルノ品位ヲ保チ外人ノ信頼ヲ受クルニ至ラシムヘシ

この要目には、日本国民として「国体ノ尊厳」、「国民道徳」の会得に加えて「土地ト相親シムノ

念ヲ養ヒ質素ニ安シ勤労ヲ楽マシムヘシ」と今後の満洲運営の担い手の育成が目標として掲げられている。

さらには1920年頃から内地で郷土教育の機運が高まったことに対応して、満洲を郷土として位置付けることによって、満洲の国土化を観念づける営みとなっていく[20]。一方で、「日本人児童にとって満洲は異国の地である。満洲の日本人児童に対して郷土教育といった場合、母国の風俗習慣を忘れないための内地延長主義教育こそが郷土教育である」[21] という指摘もなされていた。

このような見解の相違を反映し、当時、満洲の教育界において日本人子弟の教育をめぐって次のような議論が展開されていた。

> 其の一は、満洲の地は、我が忠勇なる将士の血を流した霊地である。この霊地に於いて少年子弟を教育することは却つて忠君愛国の信念を固むる所以である。祖国はこれを見ずして憧憬の聖地として置いた方がよい。見せると却つて失望するのではないか。といふやうな説。
>
> 他の一は、義務教育を終るまでに必ず一度は祖国を見学させねばならない。然らざれば国民的素質が薄らいでしまふといふ説[22]。

引用文にあるように、満洲育ちの日本人子弟を対象とする母国見学については賛否が分かれていた。とはいえ、満洲の土地に根をおろすことを目標とする「現地適応主義」においては、単に児童たちを満洲の風土に適応させるだけではなく、同時に満洲に生れ育った児童たちに愛国心を植え付けることの重要性が強調されている。

以上のような流れの中で、1920年より満日社は関東庁と満鉄の後援により在満児童たちの忠君愛国観念を涵養し、満洲に定住し、その開拓、発展に寄与する第二の国民を育成するという趣旨で、在満児童母国見学団として在満児童の内地への修学旅行を企画した。

1．2　関東州における交通状況：「日本―朝鮮―満洲」交通網の形成

一方、当時、鉄路と航路による「日本―朝鮮―満洲」交通網が整ったことで、在満児童母国見学が実現したと考えられる。

19世紀末から20世紀初頭まで、鉄道は帝国主義列強が中国に進出するための主要手段であった[23]。朝鮮半島では、日清戦争中の1894年に日本政府は朝鮮政府との間に日韓暫定合同条款を締結し、京仁間（京城―仁川）・京釜間（京城―釜山）鉄道施設権を獲得した。ところが、資金難や朝鮮民衆の抵抗などで工事は停滞した[24]。

その後、日露戦争を機に朝鮮半島の各鉄道は速成され[25]、1905年になって京城―釜山間で営業運転がようやく開始された。この京釜鉄道の全通をうけて、同年9月山陽鉄道が関釜連絡船を就航させたのである。それ以前の1901年に、山陽鉄道は日本で神戸―馬関（のちの下関）間を全通させた。続いて1905年8月には官鉄と山陽鉄道を直通する新橋―下関間急行列車が新設されており、これと京釜鉄道全通・関釜連絡船新設をあわせた鉄道と航路の連絡によって、日本―朝鮮間を結ぶルートが誕生し、後に形成される「日本―朝鮮―満洲」ルートの端緒が開かれたのである[26]。

一方、満洲では、日露戦争後、東清鉄道（ハルビン・旅順間）を始め、臨時軍用鉄道を含むさまざまな幹線や支線が次々と作られるようになり、またそれらを受け継いだ満鉄時代にいたっては、鉄道の敷設がさらに大きな進展を見せることになる[27]。1907年4月、満鉄は、日本軍の満洲からの撤退完了と同時に営業を開始することになった[28]。それにしたがい、同年5月から本線及び支線の広軌事業に着手し、同年12月に旅順―大連において広軌列車の運転が始まり、次いで、翌1908年1月に大連―瓦房店、同年4月に奉天―鉄嶺、鉄嶺―公主嶺、公主嶺―長春―西寛

城子、さらに、同年5月に長春方面より相次いで試運転を行ったことにより、全線にわたって広軌列車を開通させた[29]。大連―蘇家屯間の複線工事も同時に着工され、1909年10月に全線の複線運転が実現した。これに対して安奉線の改築は1911年10月に竣工した[30]。それ以前には、1908年に京釜線の釜山延長により釜山・新義州間の朝鮮半島縦貫直通列車が開通している[31]。

そして、1911年11月、2年にわたる中朝国境の鴨緑江架橋工事が竣工したことにより、釜山―京城―平壌―新義州―安東―奉天、すなわち、従来の朝鮮半島縦断鉄道である朝鮮鉄道と満鉄が直接連結した[32]。それと同時に南大門―長春間直通連絡が開始された。そして、翌年の1912年には釜山港第一桟橋架設工事竣工にともない直通列車は釜山に延長され、新設された下関・新橋間直通特急に接続した。さらに1914年には下関の連絡桟橋が完成した。このようにして「日本・朝鮮・満洲」間の連絡ルートが確立されたのである[33]。

一方、1905年1月旅順開城とともに満洲開発の先駆として大阪商船株式会社（以下大阪商船と略す）が大阪―大連線を開設した。当時日本郵船も大連線を開通させ大阪商船と競争したが、間もなく協定が成立して撤退したため大連航路は大阪商船が独占することになった。大阪―大連間の航路は1906年4月から逓信省の命令航路となり、毎週2回の航海を行い、大阪から神戸・門司を経て大連へいたる航路を開設した。その後、租借地関東州の経営と満洲の開発及び満鉄事業の隆盛とともに、この航路の重要性は益々増加した。

1910年4月に日満連絡運輸、1911年3月に日満露連絡運輸、さらに1913年6月に欧亜連絡運輸を開始したため、大阪―大連線は欧亜連絡幹線として国際交通網において重要な役割を担うことになった[34]。

以上のように、鉄路と航路による「日本―朝鮮―満洲」交通ルートの整備が、在満児童の母国見学を実現する大前提となったのである。

1.3　先行研究について

見学団は関東州及び満鉄沿線各地における小学校尋常科5、6年、高等科1年[35]の男子生徒を参加対象団員として、1920年から1925年にかけて年1回、毎年春に実施された。見学団は6回実施され、参加団員の総数は492[36]名にのぼった。

しかしながら、この問題に関してはこれまでの研究ではほとんど言及されていない。従来、政治、経済、文学などの分野から、台湾、朝鮮、満洲を対象とした日本植民地研究が展開されており、近年では、近代日本の植民地を「観光」という現象から論じる研究も活発に行わるようになってきている。中国東北地方、朝鮮半島への大規模な満韓修学旅行に関しては、多くの研究成果が出されているものの、その多くは、内地による日本の植民地への旅行である[37]。しかも、それらの研究においては、教育史の視角から高等師範学校や高等商業学校の生徒による修学旅行や教員の鮮満視察旅行に着目する研究が多い。ほかには、満洲教育史の視点から、満洲在住日本人子弟の教育と教科書[38]、日本人のアイデンティティー[39]、あるいは、満洲国成立後の日本人教育に関する研究[40]も行われているが、植民地教育政策の一環として実施された在満児童母国見学団についてほとんど言及されていない。

また、日本統治下南洋群島における旧来からの住民を対象として組織された内地観光団を取り上げた千住一の一連の研究が挙げられる[41]が、日本の植民地・占領地あるいは海外における日本人移民による日本内地への観光、特に植民地における日本人小学生の母国見学に関する研究はほとんど行われてこなかった[42]。

つまり、従来の植民地ジャーナリズム、植民地ツーリズム及び植民地教育史において満日社が主催した見学団を取り上げたものはほとんどない。わずかに『「満洲・満洲国」教育資料集成　第16巻　教育通史Ⅱ』、『満洲教育史』が見学団を基本的事実として記述しているのみである[43]。日本内地における同時期の『朝日新聞』、『読売新聞』

には、見学団に関していくつかの新聞記事が掲載されているものの、全体の状況が確認できるようなものではない。

しかし、1920年から1925年までの『満日』の紙面は、第1回～第6回の見学団について詳細に掲載しており、その実施趣旨、実態及び成果を明らかにすることが可能である。本稿は、満日社が主催した在満児童母国見学団に焦点をあてることで、満日社が、日本の大陸政策を推進するために、如何に植民政策を支えていたのかについて検討する。

2.『満日』紙上に見られる見学団

1920年2月6日の『満日』には次のような第1回見学団に関する社告が掲載されている。

我社満洲日日新聞は植民地教育の発展向上に関し満鉄の満蒙教育研究会と趣旨を同ふし各般の教育施設に就て努力を拂わんとす而して満洲に於ける学生生徒にして母国の事物に接触せざるもの少からずこれ等は其訓育に缺くる所無しとせざれば物質精神両方面に亘りて母国の事情を理解する必要あるを認め我社第一回の施設として左の方法に依り在満生徒を内地に送り修学観光の快挙を敢行せんとす

一、期時（ママ）　本年三月下旬大連出発四月中旬大連帰着

二、旅程　海路大連出発神戸上陸、神阪（ママ）見物、桃山御陵伊勢大廟参拝後、名古屋を経て上京、東京見物の上京都に引返し観光、神戸より乗船帰着

三、経費　一切本社に於て支弁す

但し沿線生徒にして大連迄の費用及び大連帰着後帰還の費用は自弁とす

四、組織　関東州内高等小学校及び満鉄沿線各地小学校高等科男生徒現在の一年生より州内二十五名、州外二十五名を各校に於て選抜し五十名の見学団を組織す

教員四名、医師一名同行及び本社員二名同行す

五、選抜　見学団加入の選抜は一切当該学に一校仕す

右の如くして最も安全に最も愉快に見学の目的を達せんとするものにて殊に教員医師等の附添あり父兄は何等の危惧なく其子弟を託すことを得べし而して内地各所の見学観光に就ては文部省、鉄道院其他政府関係当局並に府県当局等大々の便宜を図ること丶なり居れば其目的は十分に達せらるべきを確信して疑はず[44]。（下線筆者、以下同）

ここには、見学団の趣旨、見学期間、見学中に利用する交通機関、見学団の日程、見学ルート、経費、団員の選抜などについて詳しく記されている。また、日本側では文部省、鉄道院、その他の政府関係当局、府県当局などが、見学団への便宜を提供したことも確認できる。その後、『満日』は連日、出発前の準備（注意事項、団員・附添教師・団長・特派記者、団歌、各学校長ら関係者の期待等を発表すること）、見学中の現地便り、そして帰着後の一定期間において参加生徒の旅行記や感想文を紙面で連載している。『満日』はその後の毎年度も同じ形式で見学団の情報を公表している。以下でそれぞれについて考察してみよう。

2.1　社告に見る見学団の実施趣旨：植民地経営の人材育成

社会教育の一翼を担う機関である満日社は「長年にわたって、日本の満洲経営において各般の施設の整備がいよいよ進んで、満洲に移住する日本人の数も増えるようになった。それによって日本の大陸発展の基礎が築かれていた」[45]という認識をもとに、「植民地教育の向上・発展に向けて、満洲生まれの児童を対象として母国における商工業の発達および各種の文化的施設その他名所旧蹟等を情操的に活動的に又智育方面から見学させる」[46]ことにより、「大陸経営の後

継者を育成する」という趣旨に基づき、関東庁と満鉄の後援により在満小学児童の母国見学団を企画した。

この趣旨は毎年度ほぼ同じであるが、1924年の実施趣旨には「震災後の京浜を視察するといふよりか満洲を代表した小国民が母国の不幸に同情して温かい慰問の辞を捧げ又一つには東宮殿下の御成婚に対し敬意を奉表する事になれば吾々植民地の面目上にも光があると共にドンなに母国上下の満足を得るであらうか」[47] という内容を書き加えている。

その背景について簡単に触れておきたい。1923年9月1日に関東地方で発生した未曾有の大震災に際して、人心の安定を図ることを目的として同12日に「帝都復興ニ関スル詔書」[48] が発せられた。同詔書は「東京は帝国の首都」であり、「国民経済の枢軸」、「国民文化の源泉」として国民一般から仰ぎ見られているため、震災により大打撃を受けたが、東京が「我が国都」としての地位を失うことはない、と述べている。それに対して、満鉄社長は教育当事者に訓諭を発し、地方部長に児童生徒の教育上特に留意すべき諸事項を指示した。なお、同11月10日に「国民精神作興ニ関スル詔書」[49] が発せられた直後、満洲における各学校においても奉読式が挙行された[50]。この詔書は「国家興隆ノ本ハ国民精神ノ剛健ニ在り」とし、「浮華放縦」、「軽佻詭激」を排し、「質実剛健」、「醇厚中正」と「忠孝義勇」の精神を国民に要求した。

このような状況の下で、「満洲経営の急先鋒」と自ら誇る『満日』は、これらの詔書の精神を貫徹・実践して満洲経営の後継者としての国民精神を涵養するという目的を1924年度見学団の実施趣旨に反映させたことがうかがえる。

2. 2　見学団に対する期待―教育関係者からのメッセージ

1920年第1回から1923年第3回にかけて見学団に関する社告を発表後、『満日』は連日にわたって紙面で、各小学校、満鉄学務課、児童の保護者など教育関係者からのメッセージを掲載し、見学団に対する期待を表している。以下にいくつかの例を取り上げ、その内容をまとめてみよう。

(1) 各小学校からのメッセージ

例1.「広く浅いよりは狭くとも深き観察を」
旅順第一小学校長：野間雅人

貴社主催の学校児童内地見学旅行は必ずや良好なる結果を収む可き事と信じ衷心賛意を表する共に其の効果の大ならんことを祈る次第であります（中略）私一個の希望と注意とを申上げれば次の如くであります

(一) 植民地の児童として母国の事情を知り自然の風光に接して比較研究の態度を取しめたい

(二) 観察材料の多からんよりは国民教養上最も必要なる資料を徹底的に見学せしめて感奮興起せしめたい

(三) 観察の凡てに就き其の歴史を説明して物質的精神的努力の結果なることを充分に知らしめたい

(四) 慈愛深き両親の膝下を離れて旅行するのであるから憂撫的擁護の下に愉快なる且つ規律ある旅行ならしめたい

(五) 郷国の事物を見学するのが主であるから勿論贅沢心を起すやうな旅行をなさしめたくない

(六) 旅行の沿道署地図並に地理歴史等に関する大要の説明書を作製して予め一般に■ちたい[51]

例2.「知識よりも情意方面の陶冶を」 奉天小学校長：河村音吉氏談

今回貴社がお企てになつた内地見学の御催しに対しては誠に結構な事と申すの外ありません而して其の目的は云ふ迄もなく訓育的で情意方面の陶冶を主眼となさる事と愚考いたします尚私共の立場から此の修学旅行に対する希望を申し上げますと

第一、宮城（(第2次世界大戦後に皇居と呼ん

でいる)、神宮、山陵、御所等の拝観に依り国体皇室に対する尊崇の念を一層深厚ならしめること
第二、忠勇賢哲、偉人等の歴史的遺跡を訪ねて大いに士気を鼓舞し兼ねて祖先崇敬の念を高めること
第三、母国民の活動並びに事業発展の模様を知らしめ将来国家の為に貢献せんとの観念を抱かしめること第四、教科書で教へた諸種の事項を直観せしめ具体化せしめて其の理解に資すること
第五、祖国の気候風土山川等に接して内地気分を味はしめ一面趣味の向上を図ること等であります[52]。

例3.「母国見学団員に望む」長春小学校内：平川寛三

第三回母国見学団が組織され各位はその団員となられました。定めしお悦びの事とお察しします。私も第一回の見学団に附添うて旅行しました。その際にいろいろ感じましたのでその当時愚感を記した事もありましたが今又参加せらるゝ各位に御注意を願たいと思ふ事柄を申上げたいと存じます。

第一には旅行団の体面を汚す様な事のない様に皆さんが自分々々で充分注意して頂きたいのです。(中略)団体に参加したものゝ一挙手一投足も皆団体の体面に関するのであります。のみならず在満洲児童全体の声誉に関する事と思ひます。(中略)

第二には各位の言葉遣ひに御注意が(ママ)願ひたいと思ひます。(中略)人の用ふる語によつてはその人の品格を或程度迄察する事が出来るものと思ひますかういふ次第ですから旅行中の言葉遣ひ(平素でも)には特に注意して人の感情を害する様な事や自分の品格を下げる様な事のない様にしてもらいたいと存じます。

第三には金銭を濫費されない様に御注意を願ひたい。(中略)

第四には各位が内地に行かれたら松、竹、梅、桜等日本在来の植物をよく観て頂きたいと思ひます(中略)今度の旅行には之等を観て各位が普通の植物に対する知識を豊富にするの好機会と思ひます。たとひ路傍の一草一木と雖も見落す様な事なく観察して頂きたいと希望します。

第五には内地に居る日本人は非常な努力を持つて勤労して居ますその実況■■■に観て頂きたい満洲に居る日本人は少し勤労を要する事になると低級な支那人を使用し日本人は勤労する者に非ずといふ様な態度が見えないでもありません。然るに一歩内地の土を踏むと内地人がセツセと労働もし活動もして居ます。この日本人の態度を充分味はつて諸君が将来満洲に於て活動せらるゝ基本にして頂きたい。私は満洲に居る日本人はもつともつと勤労する事を厭はない様にならなければならないものと思つて居ります[53]。

(2) 満鉄学務課長からのメッセージ

例4.「学童母国見学に関する希望　旅行によつて得る効果　所謂百聞は一見に如かず　発育盛りの児童が内地見学によつて智識の蔵を拓くを喜ぶ　保々学務課長談」

(前略)小児の内地見学団と云ふ事は殊によい事である、殊に学問に携はつて居る小学校の児童に於て更に其の感を一層深くなるものである(中略)僕は旅行と云ふ事は如何なる場合でもよろしいものだと云ふ事を考へて居る一人で、教育盛りの小学校生徒に於ては尚更効果も多かるべく双手を挙げて賛成するものである、子供の智識は教室で授かるのも尠なくないが夫よりもヨリ以上に効果あるものは旅行で所謂百聞は一見に如かずで余が如何なる都合如何なる人と雖も旅行はよろしいと云ふ所以は茲にあるのだ[54]。

(3) 保護者からのメッセージ

例5.「保護者より植民地の児童に　祖国の美風を感銘させ度い」俣野義郎氏談

満洲日日新聞社が社会教育の為め一昨年か

ら在満小学児童母国見学団を組織して毎年一回心地よき春の初の殊に学期の終りに祖国の文化的施設や祖先の遺風を実地に見学させるのは此上もなき美挙であること丶喜んで居た（中略）植民地殊に満洲に生まれた子供で内地の天地に接せぬものは神社仏閣に対しての観念が殆ど無いし祖先の何んたるかも知らぬものが多い又教育の程度も智力の発達も東京等に比して劣つて居ることは事実で（中略）されば祖国の美風や神社仏閣を実地に見学し平易に説明を加へば小さき頭にも容易に注入され智識の発達は意外のものであらうと思う、而して神社として伊勢大廟であるが一面に於て祖国の人々が小さき■家に住居し苦心惨憺して田畑の耕作又は労働に従事して居るのを見せて満洲の生活状態と比較させて今一層の奮闘心を起さすることが最も必要と思ふ、（中略）子供等は出来る限り母国見学をさせて祖国の如何なるものかを味はせたい（中略）そして永遠に此壮挙を継続し単に小国民の為めでなく延いて祖国の為め尽力されんことを希ふのである[55]。

以上の例から、前述した見学団の実施趣旨に基づき、満洲教育関係者がさまざまな角度から見学団に対する期待を詳しく述べていることが分かる。その主旨は、下線を付した部分から次の5点にまとめられる。

(1) 愛国心の涵養

満洲に生れ育った子供は、母国への帰属意識が希薄である。見学中において伊勢大廟、宮城、明治神宮などを拝観し、乃木神社などの忠勇賢哲の歴史的遺跡を訪ねてさらに母国民の活動及び事業発展の実況を見ることにより、皇室尊崇と祖先崇敬の念と国家のために貢献しようとする愛国観念を涵養することを目標としている。

(2) 知識の獲得

母国の山水や神社仏閣などを実地に見学し、教科書でしか満洲では見ることの出来ないものについて平易に説明を加え、知識の獲得や理解を深めることを目指す。

(3) 自立の精神と集団意識

両親のもとを離れた長距離の見学旅行であるため、周りに依存せず自分のことは自分で処理する自立の観念を形成するのみならず、見学中の集団宿泊などの団体活動を通じて、生徒たちの規律意識、仲間意識、集団意識の芽生えを培うことも期待できる。

(4)「在満児童を代表する」行動規範

団員たちは在満児童の代表として、その一挙手一投足が団体の名誉、さらに満洲全体の体面に関わるので、母国滞在中において言葉遣いなどの行動規範を守ることが極めて大切である。

(5) 金銭観念と勤労意識

「満洲の子供は内地の子供より金銭を濫費する癖がある」と指摘し、母国滞在中、物欲を自制して、親から頂いたお金を濫費しないよう注意がうながされた。また、「満洲に居る日本人は少し勤労を要する事になると低級な支那人を使用し日本人は勤労する者に非ずといふ様な態度が見えないでもありません」と批判し、内地日本人が持つ勤労の姿勢を見習わせ、在満児童たちの勤労意識を醸成することを目指した。

こうした期待の背景には、関東州・満鉄附属地の児童の特性に応じた配慮があると考えられる。満鉄創設時代に在満児童の特徴について満鉄沿線各地の小学校において調査が行われている。それによると、在満児童の短所として、「奢侈贅沢の気風」、「孤立的で協同一致の精神に乏しい」、「規律作法正しくない」、「倦怠懦弱」、「勤労をいやしむ」、「金銭観が薄い」、「同情心と約束を守る念が薄い」、「謝恩の念が乏しい」、「満洲の土地に愛着の念が乏しい」、「祖先に対する念が乏しい」などといったことが挙げられている[56]。在満教育関係者はこうした在満児童の短所を認識した上で、それを補完する1つの手段として見学団に大きな期待を寄せたということがうかがえる。

2.3　出発前の準備

2.3.1　見学団員の選抜

毎年度、団員の選抜は関東庁及び満鉄学務課によって実施された。具体的には、「中産階級を目標とせられた上」[57]（1）満洲で生まれ育ち（2）一度も日本に渡ったことのない（3）最近5か年以内において転校したことがない[58]、関東州及び満鉄沿線各地における小学校尋常科5、6年、高等科1年の男子生徒が団員とされている。この応募要件に基づき、各学校の生徒数に応じて参加者の人数が割当られた。また、付添教員の選抜について、関東庁及び満鉄学務課は各自の管轄範囲において各学校から選任することとした（表1参照）。

そして、付添教員の人数によって団員はいくつかの班に分けられ、各班に班長を配置した。付添教員は代理保護者として、見学中のそれぞれの所属する班の生徒を保護し監督する義務を負っていた。

主催者として満日社は社員の石橋文三郎[59]（第2回～第4回）、高塚源一（第5回～第6回）を見学団団長、本田康喜（第1回）、今杉好美（第2回）、永嶺信恒（第3回）、石田薫（第4回）、池内忠蔵（第5回）、鵜川久介（第6回）らを特派記者として派遣した。

表1　第1回―第6回「在満児童見学団」参加生徒・教員一覧

年度	関東州		満鉄沿線	
	生徒数（名）	教員数（名）	生徒数（名）	教員数（名）
1920年（第1回）	25	2	25	2
1921年（第2回）	35	4	35	4
1922年（第3回）	67	6	41	4
1923年（第4回）	40	4	40	4
1924年（第5回）	45	4	45	4
1925年（第6回）	49	4	45	4
合計	261	24	231	22

出所：1920–1925年『満日』により筆者作成。

このように、見学団の組織は関東庁、満鉄、満日社によって成立していた。

2.3.2　旅費

見学団の経費に関しては、第1回目は満鉄沿線各地から大連までかかる往復交通費を除いて、満日社が見学旅行中の全ての経費を支弁した。1921年第2回目に際して、満日社は「前回は一切我社に於て負担処弁したが、かくては永続性を缺くと同時に素白純真の児童に独立自修の念を涵養せしめざる憾みあり且つは卑屈に流れしめる虞れなしとも限らず、此の点を慮り」[60]という理由で、往復交通費（船車料金）金40円は団員の自己負担とすることを決めた。ただし、満日社は見学中にかかるその他の費用を支弁することとした。

実際には、毎年度において鉄道院及びその他の政府関係当局、府県当局、満鉄、満日社東京支社など各方面は、見学団に便宜を提供していた。詳しい状況を表2にまとめて示す。

表2に示すように、見学団は道中、鉄道院、満鉄、大阪商船会社から特別車両の提供や運賃割引などの援助を受けたほか、大連、満鉄沿線附属地や見学都市において県庁、商店、学校、新聞社などの各方面から寄付金や寄贈品を受けたことが分かる。1922年第3回目には、「旅費は実際に於て一人宛六十七圓余要するが各方面から多大の同情があつたので四十五圓にな」り[61]、その後の3回の旅費も金45円とした。

2.3.3　見学団歌「東洋平和に捧げんと」と団章

見学団は第2回目から団歌と団章を制定するようになった。具体的には以下のようなものである。

第2回母国見学団の歌（あゝ玉盃の譜）[62]

一、愛国の血に萌え出でゝ　満洲野（ますの）彩る若桜　母国の春に会はゞやと成れる我等の見学団　大連港をあとに

表２　見学団への便宜供与に関する状況

	各方面からの協力	寄贈
第1回 （1920年）	鉄道院：特別車輌一両を連結 大阪商船会社は往復乗船を五割引として優待 神戸市市役所：市内見学を案内 万朝報：写真班を特派 陸軍省：見学団のために小石川後楽園を開放	古財治八：金五百圓 藤飯弥太郎、馬場金助：金百圓 大連鈴木商店支店主任濱田正稲：金五百圓 奉天毛原洋行、大連木原薬局、関東庁東京出張所、満日社東京支社、丸三会社、毎日新聞社、中井洋紙店大阪支店などからの寄贈品多数
第2回 （1921年）	東洋汽船株式会社：船内諸般設備などに関するものを紹介 神戸市視学：市内見学を案内 名古屋市学務員：市内見学を案内	大連宅合名会社、神戸市、兵庫県庁、大阪府学務課、王子製紙会社大阪支社、大阪毎日新聞社、第四師団司令部、大阪市役所、京都銅駝尋常小学校、名古屋新聞社、日本燐寸株式会社、奈良市役所、名古屋市役所、京都市役所、島津製作所、関東庁東京出張所、満鉄東京支社などからの寄贈品多数
第3回 （1922年）	満鉄：内地旅行中の汽車の提供 鉄道省：車輌一両を借切る 大阪浪速洋行：自動車二十台を提供	満洲起業会社事務取締役千田次郎：金百圓 無名氏：金二十圓 満洲製菓株式会社、朝鮮総督府、安東民団、大阪浪速洋行、大連林洋行、名古屋市及び県庁、新愛知新聞社、神戸市などからの寄贈品多数
第4回 （1923年）	満鉄：特別車輌の提供 名古屋駅長の特別なる配慮により東京までの連絡列車の提供 満日東京支社、関東長官伊集院彦吉、満鉄社長川村竹治らの斡旋により宮城拝観を許可 大阪浪華洋行：自動車22台を提供	京城府庁各学校、全羅南道憲兵隊長、京城日報社、渡辺均平商店京城支店、名古屋新愛知、新報聞社、大連三越呉服店、大連林洋行などからの寄贈品多数
第5回 （1924年）	満鉄病院臨時東京出張所：団員の健康診断を施行した 満鉄：釜山に直通の畳敷客車を提供した 満日東京支社：陸軍省や航空隊と交渉し飛行機見学をすることと決めた 満鉄東京支社：東京見学中に自動車を提供した	満日奉天支社、朝鮮銀行、カルピス本店、三越呉服店大連支店、満鉄京城鉄道局、京城日報社、朝鮮新聞社、京城日々新聞社などからの寄贈品多数
第6回 （1925年）	満日東京支社：1）宮城拝観を斡旋した 2）戸山学校での演習模擬戦について陸軍当局に交渉した 満鉄：大連から連結して行った畳敷列車を提供した	満日社遼陽支局、奉天尋高父兄会、奉天第一小学校父兄会、奉天第二小学校父兄会、大阪屋号書店、奉天清野新聞舗、満日社奉天支社、中山太陽堂、三越呉服店、仁丹本舗森下営業所、ライオン歯磨小林支店、ブルトーゼ発売元藤澤友吉商店、丸三合名会社、満鉄鮮満案内所、大阪商船会社、大阪毎日新聞社、岡山市の教育会などからの寄贈品多数

表注：『満日』により筆者作成。

して　　嬉しや茲に鹿島立ち

二、朝鮮半島迂廻して　　玄海洋に来かゝれば　　思ひぞいずる弘安や　　日露の役の大快戦

響を永久（とは）に語るらん　　逆巻く怒涛の勇ましさ

三、翠緑の国絵の如く　　今前眼（ママ）に近づきぬあゝ我母国大八洲（おおやしま）

瑞穂（みずほ）の国は笑を以て　五百重（いほへ）の浪路渡り来し　我等迎ふる嬉しさよ

四、関門海峡入り来れば　内海波は静かにて　尽きぬ眺めの須磨明石　歴史の蹟をたづねつゝ　舞子浜風松葉散る　靄の昼の真帆片帆

五、我乗る船よサイベリヤ　此処は神戸の港なり　あゝ忠臣は楠公の　あゝ忠臣は菊水（きくすゐ）の　流れはつきぬ湊川　社頭に襟を正しつゝ

（六節～十六節を中略）

十七、神戸の港船出して　いざや帰らん新日本　父母同胞（はらから）も待ちまさん

忠孝の国花の国　日本国よ永（とこし）へに　栄よさらばいざさらば

十八、二旬の旅を無事に了（を）へ　春まだ浅き遼東の　山も程なく見えてくれば　父母恋しさの弥まさる　やがては花と咲き出ん　家苞（つと）満（み）てし胸の中（うち）

（終わり）

第3回母国見学団の歌「東洋平和に捧げんと」[63]

一、東洋平和に捧げんと　若き血汐は迸る満洲野に咲きし健児等が　母国の春を訪んと　心も勇み鹿島立つ　我等満日見学団

二、幾年夢にあこがれし　祖国は花の園生なり　大君居ます千代田城　上野を飾る平和博　清き流れの五十鈴川　富士の高嶺も仰ぎ見た

三、げに三旬（ママ）の旅枕　尊き恵みに浴すなる　我等の幸を胸に彫り　若草萌ゆる満洲に　文化の花を移し植え　共に培ひ養はん

下線を付した部分には、歌詞に見学団の日程に基づき、各見学地の地名、歴史、風物などを織り込まれているだけでなく、「瑞穂の国」、「忠孝の国」、「東洋平和に捧げんと」などの内容も含まれている。団歌の内容を総合的にみれば、「愛国の血」に燃えた「満洲野」の健児は、夢にも憧れた祖国に渡り、「二旬」にわたって、祖国の長い歴史や壮麗な山河を見学することにより、皇室や国体の「尊き恵み」を「胸に彫り」、それら「文化の花」を「新日本」としての満洲に移し植え、「東洋平和」、「日満共栄へ尽力しよう」と、児童らの愛国心を鼓舞する意図など、前述した見学団の実施趣旨や教育関係者らの期待の主旨はほぼ団歌に反映されていることが分かる。

主催者は見学中において満洲各地方から集まった参加児童に団歌を頻繁に歌わせて、生徒の意識を統一した上で、「忠孝愛国」「国体尊崇」の観念を知らず知らずのうちに、児童に内面化させる意図がうかがえる。

団歌の制定とともに、団章も設けられた。団章のデザインは図1に示すものである[64]。「母国見学団」のシンボルとして、見学中において団章を胸や肩など見やすいところに付けることが定められていた。

主催者である満日社は見学日程、団員名簿、各地見学要項附鉄道案内、見学団団歌、嘱託医名、宿泊旅館、大阪、東京見学世話係氏名等の印刷物を作成し、出発前に各学校を通じて参加生徒に配付した。

図1　第2回見学団団員章
（出所：1921年3月20日付『満日』より）

2.4　出発当日の光景

見学団出発当日の光景は、『満日』にその都度掲載されている。以下、第1回目見学団を例として取り上げてみよう。

（前略）在満生徒を内地に送り修学観光の快挙を企て一月以来紙上に発表し一般の多大なる喝采を博し又甚大なる同情を得たるが其後者着々準備を整へ愈々昨二十日出帆の哈爾賓丸にて其壮送に就く事となれり之より先き我社よりは人を派して船内の準備を為し万遺憾無きを期し各児童の来着を待てば集合定時午前十時大連高等小学校生徒十六名は羽場教師に引率され旅装軽々しく元気よく到着し之に送るゝ十分にして奥地長春鉄嶺四平街開原奉天安東大石橋等の各学校生徒を乗せたる列車は埠頭に到着し茲に全員の到着を見海務局前庭に整列し本田記者の挨拶に次で西片本社副社長（中略）の挨拶あり終つて、紀念の撮影を為し、九時三十五分憧れの内地に向ふべく。喜色顔に溢れ意気揚々として乗船すれば、民政署学務課、満鉄学務課及び大連高等小学校生徒其他父兄親戚知己の見送り之に続き、歓声湧くか如く。此日、中西満鉄副社長、杉浦理事其他乗客満員の事とて、埠頭は空前の盛況を呈し、之等の見送りも我社の壮図を賛し、同一団となりて学生見学団に対して万歳の声を浴せ、午前十時歓呼裡に懐かしり内地へ向け、黒煙を残して解纜せ[65]。

引用文からは、出発当日、参加児童が各地から大連へ集合し、大連埠頭にある海務局の前庭に整列し、主催者からの挨拶の後に、記念撮影をして大連民政署学務課、満鉄学務課及び参加生徒の父兄や親戚などの見送りを受け、大阪商船会社のハルビン丸に乗込んだ状況が読み取れる。また、図2に示すように、大連埠頭に参加児童、見送り人及びその他の乗客が多数集まる様子から、当日の盛況を推測できるだろう。

我社の學童母國見學團
出發す

図2　第1回目見学団出発当日の光景

そして、出発当日、満日社副社長西片朝三は団員に次のような送辞を述べた。

（前略）我日本国は年々五六十万づゝ増えるの人口は到底内地の如き小さき島国には這入りきれない（中略）依て我日本国では此満洲が最も必要な所である。万一此満洲を失ふときは丁度金魚が水を失ふやうな状態になるのである。（中略）此大切の満洲を満洲に生まれ、又は満洲に成長せらるゝ皆さんの腕によらねばならぬところであつて、其責任は皆さんの肩に掛つて居るのである[66]。

以上の内容から分かるように、主催者は狭い国土に多くの人口を抱える日本の実状を述べながら、日本に対する満洲の重要性を強調した。また、日本と満洲とが緊密な関係であると訴えたことから、見学団員に「帝国臣民として日本のために、満洲のために尽力しよう」という意識を向上させる意図がうかがえる。

このように、諸準備を整えた上で見学団は各方面からの期待を背に「花咲き鳥謳ふ、懐かしの母国」[67] へ向けて出発したのである。

2.5　母国見学の実態

2.5.1　見学都市及び場所

各年度の見学都市及び場所を整理したものが表3である。

表3に示すように、第1、2回目の見学は大連を出発し、海路で神戸に上陸するというルートを取ったが、1922年第3回から往路は大連から出発し、鉄道で朝鮮を経由し、京城、釜山において市中見学を終えてから関釜連絡船で下関に上陸し、さらに山陽線で神戸に至るというルートに、復路は神戸を出発し海路大連に帰航するというルートに変更された。

見学都市は、東京、大阪、京都、名古屋、奈良、神戸、また朝鮮の京城、釜山を中心とする。旅行中は主に鉄道によって諸都市間を移動した。見学場所はさまざまであったが、分類すると、次の9点にまとめられる。

(1) 伊勢神宮、宮城、明治神宮、御所、桃山御陵など、天皇制と関係の深い場所
(2) 靖国神社、乃木神社、豊国神社、東大寺、清水寺、興福寺などの神社仏閣
(3) 二重橋楠公銅像、乃木邸などの忠勇賢哲の歴史的遺跡
(4) 貴衆両院、外務省、海軍省、司法省などの政

表3　1920年～1925年母国見学都市及び場所一覧

見学ルート	見学場所
1920年第1回（3月20日～4月3日） 大連港出発（大阪商船会社ハルビン丸）→門司）→下関→神戸→大阪→東京→名古屋経由山田→京都→神戸→大連港	下関：八幡製鉄所 宮島：厳島神社 大阪：中之島公園、大阪城、天王寺、興福寺、帝室博物館、市民博覧会、大大阪記念博覧会、中央公会堂、造幣局、砲兵工廠、王子製紙場、中山太陽堂化粧品製造工場、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社、愛日尋常高等小学校、船場小学校、千日前、道頓堀、松竹座、三越呉服店 東京：宮城拝観、靖国神社、明治神宮、新宿御苑、東宮御所、乃木邸、二重橋畔楠公銅像、西郷翁の銅像、愛宕山曲垣平九郎の旧蹟、桜田門、増上寺、高輪泉岳寺、通天閣、後楽園、上野動物園、日比谷公園、小石川植物園、帝国劇場、帝国議会議事堂、衆議院、貴族院、外務、海軍、司法各省を参観、関東庁東京出張所、満鉄東京支社、東洋汽船見学、鐘淵紡績会社、森永製菓会社、本所被服廠跡、三越呉服店、浅草、平和博覧会、歌舞伎座、国技館、日光見学、第一高等学校、帝国大学、永田町小学校 鎌倉：八幡宮、江ノ島、大仏、建長寺 名古屋：熱田神宮 山田：伊勢大廟、二見浦 奈良：春日神社、東大寺、興福寺、帝室博物館 京都：桃山御陵、御所、橿原神宮、平安神宮、乃木神社、豊国神社、八坂神社、知恩院、金閣寺、東本願寺、三十三間堂、方広寺、清水寺、円山公園、北野天満宮、京都市商品陳列所、嵐山、東山、耳塚、動物園、修道校、郁文小学校、南座、近江八景其他 岡山：後楽園、深柢小学校 神戸：諏訪山、布引の瀧、熊内小学校、湊川神社、日本燐寸会社工場、島津製作所 京城：景福宮、昌徳宮、昌慶苑、南山公園、漢陽公園、古の高麗の遺跡、朝鮮総督府、朝鮮銀行、美術品製作所、李王職植物園、博物館、京城日報社、朝鮮新聞社、高等普通学校、桜井小学校、南大門小学校
1921年第2回（3月26日～4月13日） 大連港出発（東洋汽船サイベリヤ丸）→神戸→大阪→奈良→山田→名古屋→東京→鎌倉→京都→神戸→宮島→門司→大連港	
1922年第3回（3月14日～4月5日） 大連駅出発→蘇家屯→安東→京城→釜山→神戸→大阪→東京→名古屋→山田→奈良→京都→神戸→門司→大連港	
1923年第4回（3月15日～4月4日） 大連駅出発→奉天→安東→京城→釜山→下関→大阪→京都→奈良→山田→東京→神戸→大連港	
1924年第5回（3月13日～4月2日） 大連駅出発→奉天→京城→釜山→下関→宮島→大阪→東京→名古屋→山田→奈良→京都→神戸→大連港	
1925年第6回（3月13日～4月4日） 大連駅出発→奉天→京城→釜山→宮島→岡山→京都→奈良→山田→名古屋→東京→大阪→神戸→大連港	

出所：1920年～1925年『満日』により筆者作成

府機関、及び朝鮮総督府、関東庁東京出張所、満鉄東京支社などの植民地関係の場所

(5) 大阪愛日尋常高等小学校、船場小学校、東京永田町小学校、神戸熊内小学校、京都郁文小学校、岡山深柢小学校、第一高等学校、帝国大学、京都南大門小学校、桜井小学校などの教育機関

(6) 日比谷公園、上野公園、平和記念東京博覧会、大大阪記念博覧会、博物館、京都南座劇場、帝国劇場、宝塚などの文化的な場所

(7) 三越呉服店、中山太陽堂化粧品製造工場、造幣局、砲兵工廠、王子製紙、島津製作所、鐘淵紡績会社、森永製菓会社、日本燐寸会社工場などの商工業工場

(8) 満日社東京支社、京城日報社、朝鮮日報社、大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞社などの新聞社

(9) 近江八景、嵐山、江ノ島などの観光名所

以上の見学場所において特に注目されるのは宮城の拝観ある。

2. 5. 2　見学団への特典―日本初小学生の宮城拝観

現在、一般の日本国民は新年や天皇誕生日の一般参賀や修学旅行などの一般参観で、皇居を拝観できるが、明治期においては宮城の拝観は宮殿営造に関して献金や献品をした人々に対してのみ許可された[68]。

ところが、第一次世界大戦の勃発、ロシア革命、米騒動という内外の衝撃がおよぼした影響は政治、経済に止まらず、思想にも波及した。民主主義・平和主義の思想は徐々に人々の心を捉え、それに伴い、国民思想も激しい動揺に見舞われつつあった。それについて、1918年第41議会に提出された「教育振興に関する建議案」では「欧州大乱の後を承け世界的思潮の動揺甚しく延て我か国民思想の上に多大の影響を及ぼすへき今の時に於て殊に国民教育の上に最善の努力を致ささるへからす」[69] という点が主張され、国民思想の動揺への対処策として国民教育の充実が求められた。以来、国民思想の善導や、皇室尊崇・敬神の念を養成することが教育上における最も重要な目標となったのである。

このような背景の下、1918年には逓信省所管の商船学校学生が課程を修了して実習に派遣される際、宮城拝観が許可された。これを嚆矢として、その以後一般の人々の拝観が次第に行われるようになっていく[70]。そして、その後も宮城拝観は拡大し続けていく[71]。

1923年2月12日、皇室尊崇の念を深めるため、東京市学務委員小久江美代吉、長町康夫両氏が宮内省に出頭、高橋事務官に会見して、東京市内小学校卒業生に対する宮城拝観の許可を出願したという経緯がある[72]。3月30日にいたって、文部省を通じて東京市学務課に「今年度卒業生から拝観を許されたので四月一杯に拝観を終るような形式で改めて出願するよう」[73] との非公式の通牒が来た。そこで、東京市では高等科6,400人、尋常科33,000人、計40,000人近くの卒業生を3,000人ずつに分けて、大体10日間で拝観させるような計画を立てた[74]。それをきっかけに、小学校の子どもに対する宮城拝観が許可されるようになった[75]。とはいえ、宮城拝観を実現する最初の一歩を踏み出したのは、日本国内の小学校ではなく、満洲からきた在満児童見学団であった。

満日社は1923年第4回母国見学団を企画した際に、満日社東京支社を通して、宮内省に見学団の宮城拝観を出願した。その後、関東長官伊集院彦吉、満鉄社長川村竹治らの斡旋によって、3月17日に宮内省は、見学団の宮城拝観を許可した[76]。同年3月27日午後に見学団一行は宮城を拝観した。

それについて、『満日』は「実に此の事たる我社のみ占有すべき光栄でなく母国植民地全部を通じての最大の光栄感激でなければならぬ、近年宮中に於かせられては国民思想の変遷に留意され皇室と民衆との接触に重きを置かせられ諸

御儀式の如き又宮内省の如き次第に簡略に開放的に御躬ら国民に質実の範を垂れさせ玉ふやうになつた、殊に国民教育の振作興隆といふことに就ては殊に重きを置かせられ児童の精神を陶冶しさうして皇室と国民との接触の上から近く全国の小学児童に対し宮城拝観を許可すべく詮衡さるゝまでに至つた、これは近く実現すること疑ひないが此時に当つて我社主催の見学団に対し拝観許可の恩典を與えられたといふことは洵に我社の光栄のみでなく全国民の光栄として感激恐慴する次第である」[77] と、感謝の意を表した。そして、満洲の教育関係者も見学団の宮城拝観について、『満日』に祝賀のメッセージを送った。例えば、大連民政署長は「満洲の如く宮城の所在地に遠く離れて内地の事情を深く知らない小学児童は動もすれば皇室に対する尊敬の念が薄くなり易い傾きがあり勝ちであるがさういふ弊害を一掃する上にも多大の意義があると思ふ、恐らく貴社主催の見学団の小学児童の宮城拝観第一回の光栄に浴するであらうが児童のためにも此の上ない幸福であると共に教育のためにも実に慶賀すべきことである」[78]、大連民政署視学は「団員は始めて宮城を実地に拝して皇室に対する崇敬の念を幼き胸に刻み今までは只学校で教科書を通じて教師の口より抽象的に教へられたのがその実物を拝することに依つて一層尊敬の心を深くし陛下の御鴻恩を感得するやうになるであらうと思ふ」[79]、また、参加児童の保護者は「今回満洲の小学児童に宮城内拝観を許された事は今日の御代の有■さが沁みじみ感ぜられる宮城内を拝観した子供は永久の其印象を深くし単に子供其ものよりも之等の子供等が将来親となつて其子弟を教養する上に於て何の位宜い効果が齎すかは筆舌に尽くし難い所であらう（中略）兎に角海外に在る一新聞社たる貴社が内地の大新聞社でさへ企て及ばなかつた事を企て愈拝観を許された事は一大成功と云わねばならぬと共に我満洲の為に誇るに足るべき事であらう何にしても感激に堪えぬ次第である」[80]

などと、満日社に祝辞や感謝の意を伝えたのに加えて、教育関係者は国民教育とくに在満日本人教育における宮城拝観の役割を強調した。つまり、母国見学団に対する宮城拝観が許可されたことには、植民地統治者が日本の植民地としての満洲の重要性を充分に認識した上で、「母国と母国の延長をつなぐ国家の最前哨線に健かに生立つ第二の国民」[81] に皇室尊崇の念を与えることにより、将来的に満洲経営の後継者として満蒙発展、国民教育における十分な役割を果たすことを期待する意図が垣間見られよう。

2.5.3　見学都市における小学校との交流

内地と満洲の生徒の親交を深めるという目的で見学団は各見学都市における小学校と交流を行った。例えば、1922年3月第3回目の見学団は大阪愛日小学校を参観した。『満日』は当日の様子を次のように掲載している。

午前十時同校を訪ふた全生徒一千余名拍手起立して見学団を迎え生徒総代は一歩を前に進めて挨拶した曰く「母国は今や島唄ひ花笑ふの好季となりました此の時期に当りまして皆々様は遠き満洲から母国の春を訪はれるのみでなく我校を観覧下さいました事は唯だ感激の外はありません吾々一千余の生徒否兄弟姉妹は親の許を離れぬ幼き燕と等しいもので今皆さんのご来阪を耳にし不甲斐なさを恥た次第であります然し吾々も何れ皆さんの様に海外に出る時も来るでありませう其時は必死の力と皆さんの援助とに依りまして忠君愛国の念を益々深くし国家の為め働きますから何卒宜しく御願ひ致します、（中略）」云々と述べ我一行は団歌を歌つて答辞に代へ夫より講堂に入り演芸会を見た演芸会は前後十数目あり歌劇学校劇、独唱ありて一同感謝し終つて茶菓の饗応を受け夫より大阪毎日新聞社を見学し三時四十分東京に向つた[82]。

下線を付した部分からは、見学団のため、愛日小学校は全校を挙げて歓迎式典を開催したことがうかがえる。生徒代表は両親のもとを離れ長旅の末に来阪した見学団に対して敬意を表した。また、在満児童が祖国を離れて遠い満洲に移住したのは、「忠君愛国の念を益々深くし国家の為め」であるとの認識も示した。さらに、将来自分たちも「忠君愛国」の念で働きたいという志を表していた。それに対して、見学団は答辞として団歌を高唱した。

見学後、見学団員は「愛日小学校から一児童が代表として歓迎の辞を述べましたが態度と言ひ演説と言ひ実に立派でありました之に対して見学団は団歌を高唱して答辞に代へました夫から学芸会がありましたが歌劇の如きは堂に入つた者でした一行は悉く感心致しまして私共も同じく日本の児童でありまして同じく稽古をして居りますがとても及びません。」[83] という感想を述べ、在満児童は、内地小学生は自分達より進んでいるとして、内地の児童の優秀さに感心していた。さらに、「之は畢竟私共の勉強が足りないからであります、帰つたら一心に勉強して母国の生徒に負けないやうにしなければなりません」[84] との認識を示した。

2年後の1924年、第5回目の見学団も愛日小学校を訪問した。見学当日、愛日小学校が行なった歓迎会において、愛日小学校生徒代表の歓迎の辞に対して、団員代表は快活かつ明瞭な答辞を述べた[85]。

このように、見学団は内地小学校との交流を通じて、在満児童に内地小学生の優秀さを見せると同時に、内地小学生に在満児童の実力を示すこともできるため、児童たちは互いの優れたところを認め合うこととなる。

ほかには、見学中、団員と見学地の小学生との間で野球試合をも行った。前述したように、1922年から見学団は朝鮮経由で日本へ向かった。朝鮮滞在中、京城、釜山の市中見学も実施した。1923年3月第4回目の見学団は京城滞在中に桜井小学校からの要請で歓迎野球試合を行った。

試合はたんに見学団と桜井小学校との間で行った野球対抗戦というだけではなく、母国を離れた満洲と朝鮮で生まれ育った少年との野球交歓会であった。それについて、『満日』は「＜数多くの試合を見たが未だ曾て斯くの如く愉快にして意義多き試合を見た事が無い＞とは観衆の口から一斉に漏れた嘆美の声であつた（中略）内鮮人観衆はスタンドを囲んで熱心に観戦しファインプレーの演ぜらるゝ度毎に歓呼の声が湧き両軍応援団の声援も却ゝ素晴らしい」と[86]、当日の場面を描いた。結果は6対0で見学団の圧勝に終わった。

朝鮮での試合をきっかけとして、第4回見学団は京都滞在中に修道校からも歓迎野球試合を行う要請が届いた。試合の結果は「七回ゲームに於いて我チームは第一回二点、第四回二点、第五回四点、第六回三点合計十一点を得たるに敵は終始振はず遂に零敗の憂目を見せしめ大いに満洲の為に気を吐き応援団熱狂したるに反して敵は全く沈黙し只我連合軍に対し感嘆するのみであつた」[87]。このような野球試合はその後の内地見学旅行でも継続された。

見学コースに野球試合が加わった背景には、次のような要因が考えられる。明治初期に日本に導入された野球は、「身体ノ強健、発達ヲ趣旨トス。之ニヨリテ、精神ヲ緻密機敏ニシ、勇気、忍耐、不屈及び共同一致ノ精神ヲ修養シ世ニ処シテ事ヲ決行スルトキノ準備トナスモノ」[88] とされた。こうした精神修養を旨とする野球は、明治期に広く日本で行われた。大正時代に入ると、「一層子供たちの野球熱は高まり、小学校の校庭が野球場となり、休み時間に行われるばかりか、小学校単位のチームが編成されるようになった」[89] という状況が示すように、野球熱は幅広い層に広がりを見せた。

一方、当時、外地で暮らしている日本人が増えてきたことに伴い、日本本土における野球熱の高まりは植民地台湾・朝鮮・満洲にも及んだ。

日本は野球を普及させると同時に、内地からの強豪チームを植民地へ遠征させる[90]のみならず、植民地の野球チームを日本で行われる全国大会にも参加させる[91]ことにより、内地と外地が共有する空間を作り上げた。そこには「内鮮満融和」の意図がうかがえる。

また、「野球の善き特性を挙ぐるなら第一に団体としての遊技である故自己の属する団体のために自己一個の利益は犠牲にし、団体に対する自己の責任を確実に守ると云ふは之れ軈て社会的公共心、忠君愛国の同念となるべき素質基礎である」[92]というように、朝鮮や内地の小学校との野球試合を通じ、母国を離れてそれぞれ満洲と朝鮮に育った児童たちは、お互いに日本人としてのアイデンティティーを喚起し合い、自分が属する満洲や朝鮮のため尽力しようという意識を高めることができたと考えられる。またそこには、日本が植民地統治手段の1つとして野球を利用することにより、指導者の指示に従順な集団を創り出そうとする企図もうかがえよう。

3. 感想文からみた見学成果：日本人としてのアイデンティティー及び満洲宣伝

前述した通り、在満日本人児童の母国見学については賛否が分かれた。教育関係者の中でも満日社が主催した見学団は本当に効果的なのか、という疑念を抱く人は少なくなかっただろう。

見学団員は、1920年から1925年にかけ全6回にわたり計492名にのぼった。表4が示すように、1920–1925年において、関東州及び満鉄沿線各地における小学生生徒総数は115,820人に達した。したがって、見学団の参加者は全体の0.5％に満たないことが明らかである。

とはいえ、教科書や教師の言葉で伝えるより、実際に目で見るという方法が有効であることは言うまでもない。参加児童は3週間前後にわたって日本国内各都市に滞在しながら古跡名所のみならず、文化的な公園や博覧会、化学工場なども見学した。そして、見学都市における小学校などとの交流も行った。母国見学が在満児童にもたらした影響は児童らが書いた感想文を分析することで明らかになると思われる。

表5に示したように、在満児童は、宮城拝観や伊勢神宮の参拝を通じて、皇室に対する尊崇の念だけでなく、日本人としてのアイデンティティーをも再認識することとなった（表5の1、2を参照）。

また、当時、在満日本人の半分近くは満鉄社員であり[93]、内地より高額な給料をもらっていた。こうした経済的な余裕が派手な生活に結びついた[94]。この意味で、満洲において余裕のある家庭で育てられた見学団員に、狭い家に住居し（表5の3を参照）、苦心惨憺して田畑の耕作または労働に従事している（表5の4を参照）内地の日本人の姿を見せることにより、国民精神涵養の一環として、在満児童の奮闘心を喚起しようとする意図もうかがえよう。

他方、在満児童見学団に対して、内地の日本人はどのような認識を示したのか。次に第3回見学団員、奉天春日小学校尋常6年生の原田順一が書いた感想文を取り上げてみよう。

表 4　関東州及び満鉄沿線初等学校生徒逐年表（1920–1925 年）

関東州		満鉄沿線	
年度	生徒数（名）	年度	生徒数（名）
1920	8,035	1920	8,432
1921	8,612	1921	9,110
1922	9,249	1922	9,559
1923	9,772	1923	10,420
1924	10,212	1924	10,830
1925	10,423	1925	11,166
合計	56,303	合計	59,517
総計	115,820		

出典：関東州の生徒数は『満洲教育史』（嶋田道彌、文教社、1935年、第47頁）、満鉄附属地の生徒数は『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』（佐田弘治郎、南満洲鉄道株式会社、1928年、1142頁）に基づき筆者作成。

（前略）又一人のお爺さんか来て

「学生さん■は、何処から来たのかな」と問ふから

「満洲から来ましたよ」と言ふと

「えー満洲から。それては支那人てすな」

「いや、違ひますよ、皆日本人てす」

「か、日本も満洲も言葉は同してすな」

こんな門答をした。またこんなことを思つて居る人かあるかと思ふと、情なくなつた。

（中略）次に久留島先生の御招待て帝国劇場へ行つた。面白い喜劇や音楽を見たり聞いたりして居る内に久留島先生か「足跡の花」と謂ふ題てお話をなさいまして、終に僕等を紹介してくださいました。

「皆さんの中に、大変元気な勇気に充ちた方々か来て居られることを御紹介致します。夫れは皆さんの後の方に徽章をつけて居る学生諸君てす我が同胞の血を肥料として生ひ育つた満洲の児童諸君てす……」すると大勢の人々の眼は一斎に僕等の方に向いた。

僕等は急に鼻か高くなり出した。

先生のお話かすむと、高い舞台の上に上つて楽隊に合せて団歌を歌つた。大変な拍手喝采てした。

そして文化の花束を貰ひ、団長さんか挨拶をなさつた後て僕等満洲の者と、内地の人と一緒に「君か代」を歌ひました。

この時は皆涙を落して、今迄威張つて居たのに急に打■れる■強い感して打たれました、そして何ても満洲て働いて御国の為に盡したいと考へました。……[95]

上述の例からみれば、見学団は見学中の内地の人々との交流を通じて、「満洲は、忠勇な将士の血を流した土地であり、満洲に在住する日本人はわれわれと同じように日本語を話す同胞である」というように、内地日本人の対満認識を深めた。また、内地の人々と「君が代」を合唱することにより、在満児童が日本人としてのアイデンティティーを再確認したことも読み取れる。

表5　団員からの見学感想文の例

番号	日付	内容
1	1921年4月11日	私は老杉天を摩す伊勢の神々しさに驚きました。
2	1921年4月17日	僕の常々の望みが始めて今日遂に達せられたのだ、それはどうしてかといふと外国人ならいざしらず自分は日本国民と生れた以上はどうしても一度は皇城を拝したいと思つて居た。
3	1921年4月19日	各地何れも建築物■道路等は寧ろ満洲の方が良いと想って敢えて驚かなかったが交通機関の完備しているに一驚を■した小さな家や小路の処に一杯詰まつて建つているのには一番驚かされた云々要するに満洲の方がいい自分達は満洲で活動するといふに一致しているようであった。
4	1922年4月2日	内地のめづらしい■■が次から次へと織り出される様であつた。山々はもう青々として木は緑の葉をたくさん出して満洲の春にくらべるとまことに早いのには驚いた、麦はもう三四寸程のびて百（ママ）しようは朝早くから畑の手入れ、たねまきをして居り、くわをかついで尻をへ（マ）し折つ（マ）てわらぢをはいてトボトボ行く様子は大変おかしかつた。内地は大変老人が多いが中々元気なもので百姓をしたり散歩をしたりしてゐるのはよく衛生上の心得をわきまへた人と云はれるであらう。
5	1922年4月2日	（前略）其の長年ののぞみをはたす第一歩に今はいつたのであるから我々の喜びは非常なものである其の祖国へ上陸して見れば我が想像以外のものであつた併し我々は大阪等の道路の悪い所等を見て将来日本人となつたならば大いに努力して益々盛んに良くしなければならないと思つた。

そして、参加児童は所属学校の代表として旅行中に各自の見学の感想を見学地から各学校に送ることが義務として定められていた。それに加えて、各学校は見学団の行程図を作成して、見学団の日程の順に従って在校中の児童たちにその地の地理や歴史について説明を行った。見学終了後、参加児童は各学校で開催された見学報告会において、見学地でもらった土産としての学習参考用品を展示したり、見聞談や感想談を発表したりした[96)]。さらに、学校生活における日々の交流を通して、見学した感想を直にほかの児童に伝達することにより、参加できなかった児童にも見学の利益を共有させるという主催者や教育関係者の意図もうかがえる。この意味で、見学団がもたらした有形無形の影響は、単に参加団員だけでなく、参加できない児童にも及んでいることが看取できるだろう。

4. 結びにかえて―植民地経営協力者としての満日社

以上、1920年から1925年にかけて継続的に組織された満日社が主催した在満児童母国見学団に焦点をあてて、『満日』の紙面記事と照合しつつ、その実施趣旨、内容及びその成果を概観した。

満洲と日本内地の間で、数週間の内地滞在を伴う往来を6年間6回にわたって定期的に操り返した見学活動によって、児童達は母国日本に関する地理・歴史知識への理解をより深めるだけではなく、伊勢神宮、宮城の拝観により国体皇室に対する尊崇の念、近代的な商工業を見学することにより母国日本への「敬意」を涵養することはもちろん、母国と満洲との関係に対する理解も一層深めるようになったと考えられる。さらに、満洲生まれの児童を「第二国民」として模範的な日本国民に育て上げるという植民地統治者の意図がうかがえる。

他方、在満児童の行動を通じて、満洲の実状を母国の人々に知らせることにより、内地日本人の対満洲認識を深めるには多少なりとも資することができたと思われる。植民地経営において、見学団が教育政策の一環として重要な役割を担ったことは否定できない。

ところが、満日社は1926年4月5日に『満日』紙面に次のような社告を掲載し、2年連続病死した団員がいたという理由で、1926年から6年にわたって実施した在満児童母国見学団を中止することとした。

「母国見学団の主催につきて」

我社主催の母国見学団は、その行程を終り、昨日大連埠頭において解散した。我社は、団員諸君の健康を祝し、将来益々、学業に専心し、邦家のため、満蒙のため、最善の努力を儘されんことを希望しておく。

我満蒙の天地において、将来大いに活動せんとする第二の日本国民を最も国民的に陶冶すべく、満蒙において生まれたるもの或は生まれたも同然なる少年諸君に、母国の風土文物を見学せしむるは、緊要かくべからざるところ、而して我社の夙に主催して恒例となり来たつたところであつた。而して殊に、皇居を拝し、宮城の拝観を差許さるることは、国民精神涵養の上に、切実深刻なる感激を与ふる、必ずしも喋々を要せざるところである。故に我社は、万難を排し、最も周到なる注意を以て、大連旅順を初め沿線各地より、優秀なる少年諸君を募集し、母国見学の壮挙を敢行し来つた。これ我社が満蒙の植民地において国民精神を作興せんとする微衷に外ならぬ。

然るに今度の一行中、奉天の松岡正三君、哈爾賓の山口■君は不幸にも東京の旅館において病没した。（中略）尽力を傾注して、しかも如何とかもすべらざる不可抗的不幸の出来を見たる以上は、我社としても、国民精神の振作にのみ邁進する訳には行かない。我社の目的とする微衷の努力は、他の手段に代へて、これを遂行すべきであらう。茲において我社は、遺憾ながら、（中略）昨年および今年の不

幸に鑑、恒例なる主催を中止し、これに代ふるに、他の適当なる方法を以て、我社の目的とするところを遂行し、些か以て国家社会に貢献せんと期するものである[97]。

下線を付した部分からわかるように、満日社は「満蒙の植民地において国民精神を作興し、植民地経営にふさわしい後継者を育成する」という目的で「在満児童見学団」を企画した。

第一次世界大戦がおよぼした国民思想の動揺、中国各地において起った排日運動などの影響で、国民精神を作興するために、日本国内だけではなく、植民地においても教育について改革が求められた。こうした状況の下で、満洲統治者である関東庁及び満鉄は、満日社の名を借りて、植民地教育を発展させる1つの装置として「在満児童見学団」を利用した意図が看取できよう。

満日社は、関東庁、満鉄の後援をはじめ、大阪商船、東洋商船、また、日本国内において満日社東京支社、関東庁東京出張所及び満鉄東京支社を通じて、文部省、鉄道院、宮内省、その他の政府・府県当局、各地における商店、旅館、小学校、工場、新聞社などとの斡旋に努めた上、「日本―朝鮮―満洲」交通網を利用し、大連を中心に、満鉄沿線各地における日本人小学生を団員として、団長、付添教員、衛生医、特派記者、団歌、団章などを含む完備な見学団を組織したのである。

見学団は、年1回、毎年春季に実施され、参加者は3週間前後にわたって日本国内各都市に滞在しながら古跡名所、近代的商工業などを訪問し、その足跡は植民地朝鮮にも及んでいた。これは日本国内外を通しても非常な「大壮挙」と言っても過言ではない。その背景には、やはり「日本―朝鮮―満洲」交通網を通じた「内鮮満一体化」の意図があったと考えられる。

また、見学場所の多くは神社仏閣及び天皇制と関係の深い場所である。そのことから遠く満洲に生れた児童たちに尊皇愛国への理解と「帝国臣民」としての自覚を育てるという主催側の企図がうかがえよう。

実際には、この時期、日本国内の修学旅行あるいは日本の植民地から内地への修学旅行において、見学させた場所の多くは、神社や近代化の成果である。換言すれば、修学旅行を通じて生徒たちの意識に国体と日本固有の歴史、近代化の産物を注入するという役割が共通している[98]。さらに、1920年代の大連在住日本人を取り巻く社会状況を簡単にふりかえると、在満児童母国見学団の果たす役割の重要性が一層大きいものとして捉えられる。

1920年代前半の満洲では、在満日本人の経済活動は低迷にあえいでいた[99]。この時点で、満洲バブル経済が崩壊し、満鉄をのぞく日本人商店･企業の大半が経営不振に陥った[100]。対照的に、中国人職人・商人が力量を蓄え、日本人に対抗する経済勢力になりつつあったのである[101]。このような状況の下、将来に不安を覚える日本人は少なくなかった[102]。この点から考えれば、新聞社、商工業工場、公園、学校など「母国工商業の発達をはじめ各種の文化施設」を見学させるのは、満洲における商工業の振興にとって大きな意味があったといえよう。さらに、そこには「帝国が世界に冠絶せる国家たる所以を解せしむる」[103] という大目標を達成する意図もうかがえる。

また、満日社は見学団を組織するにとどまらず、『満日』紙面には、見学団を組織する趣旨、団員の選抜、見学日程、見学ルート、感想文などを詳しく掲載することにより、母国見学団の趣旨を在満日本人に浸透させ、さらに、見学団に対する良好な世論環境の形成を図ったのである。当時の中国東北地域において『満日』が広く読まれたという点からみれば、見学団の影響力は東北全域に及んだことが推測できるだろう。

このように、満日社は紙面報道と事業活動という二重構造の下で、植民地経営の協力者としての性格を明確にしている。この意味でも、見

学団が中止されたとはいえ、上述の社告に「我社としても、国民精神の振作にのみ邁進する訳にはいかない。（中略）これに代ふるに、他の適当なる方法を以て、我社の目的とするところを遂行し、些か以て国家社会に貢献せんと期するものである」と記されたように、満日社は植民地経営に対する協力を依然として継続させていくことになるのである。

注

1）南満洲鉄道株式会社『南満洲鉄道株式会社十年史』原書房復刻、1974年、681頁。
2）拙稿「『満洲日日新聞』の創刊と初代社長森山守次」『Intelligence』第15号、20世紀メディア研究所、2015年。185頁参照。
3）満日初代社長の森山守次は創刊号（1907年11月3日）の「発刊之辞」で「（前略）我満洲経営の急先鋒……故に挺身満洲経営の急先鋒たるに於いても（中略）日清両国の（中略）提携相護の啓発に欠く可からざるを認識す、満洲の生命は一に懸ってこの調和に在り……」と述べている。
4）「創刊より現在に至る」1921年11月3日付『満日』。
5）拙稿「租借地都市大連における『満洲日日新聞』の役割に関する一考察―「大連彩票」の内容分析から」『総研大文化科学研究』第11号、総合研究大学院大学　文化科学研究科、2015年。46–47頁参照。
6）同上。
7）同上。
8）日露戦争前後の20世紀初頭から1930年代までを扱った津金澤聡廣『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年；1931年の満洲事変から1945年の敗戦までを扱った津金澤聡廣・有山輝雄『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、1998年；津金澤聡廣『戦後日本のメディア・イベント（1945–1960年）』世界思想社、2002年。
9）永井良和「大衆文化のなかの＜満洲＞」津金澤聡廣・有山輝雄『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、1998年、37–52頁。井川充雄「満洲事変後の『名古屋新聞』のイベント」同、113–127頁。
10）塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館、2004年、108頁。
11）『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』原書房、1974年復刻、下巻、1137–1138頁。
12）内地は、日本国内を指す。なお本稿では現在では不適当な言葉や表現も含まれるが、地名、用語は当時のものを使用した。
13）「満洲における日本人教育」竹中憲一『＜満洲＞における教育の基礎的研究』（第4巻）柏書房、2000年、76頁。
14）小泉京美「＜満洲＞における故郷喪失―秋原勝二＜夜の話＞」『日本文学文化』（10）、東洋大学日本文学文化学会事務局、2010年、84頁。
15）「満鉄教育沿革史」満洲国教育史研究会『「満洲・満洲国」教育資料集成　第16巻　教育通史Ⅱ』、エムティ出版、1993年、381頁。
16）弘谷多喜夫・広川淑子「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較史的研究」『北海道大学教育学部紀要』（22）北海道大学教育学部、1973年、34頁。
17）外務省通商局『人口問題ヲ基調トシテ満蒙拓殖策ノ研究』1929年、84頁。
18）編著者不明『関東州教育史』第2輯、1937年、113頁。
19）南満洲鉄道株式会社、『南満洲鉄道株式会社十年史』、824頁。
20）前掲、「＜満洲＞における故郷喪失―秋原勝二＜夜の話＞」、85頁。
21）竹中憲一『＜満洲＞における教育の基礎的研究』（第4巻）柏書房、2000年、245頁。
22）「満洲教育の回顧」嶋田道彌『満洲教育史』文教社、1935年、841–842頁。中には「大正初期に於ては有識者間に凡そ二種の意見があった。（中略）右のやうな次第で、祖国との関係を考慮されるやうになつて、大正五六（ママ）年頃から満洲日日新聞社の主催として、全満各小学校尋常六年から希望の児童を集め、教師付添の下に毎年春季に於て母国見学団として内地の修学旅行を実施するやになつた」と記している。
23）クラレンス・B・ディヴィス「中国における鉄道帝国主義（1895–1939）」クラレンス・B.ディヴィス、ケネス・E.ウィルバーン・Jr.『鉄道17万マイルの興亡―鉄道からみた帝国主義』日本経済評論社、1996年、182頁。
24）平山昇「“日鮮満”を結んだ鉄路と航路―関釜連絡船・朝鮮鉄道・満鉄」『歴史と地理　日本史の研究』（592）山川出版社、2006年、2頁。
25）小風秀雅『帝国主義下の日本海運―国際競争と対外自立』山川出版社、1995年、247頁。
26）前掲「“日鮮満”を結んだ鉄路と航路―関釜連絡船・朝鮮鉄道・満鉄」、2–3頁。
27）劉建輝「近代植民地と文化―遼東半島の場合」

千田稔・宇野隆夫『東アジアと≪半島空間≫―山東半島と遼東半島』思文閣、2003年、392頁。

28）鈴木隆史『日本帝国主義と満洲：1900～1945』（上）塙書房、1992年、150頁。

29）南満洲鉄道株式会社、前掲書、149–150頁。

30）鈴木隆史、前掲書、152–153頁。

31）『朝鮮』（102号）1923年10月、283頁。

32）劉建輝「制度としての旅･脱制度としての表象：旅行記述がいかに「文学」として成立しうるのか」『アジア遊学』（182）勉誠出版、2015年、131頁。

33）小風秀雅、前掲書、248頁。

34）岡田俊雄『大阪商船株式会社80年史』大阪商船株式会社、1966年、281頁。

35）1920年2月6日付『満日』の社説に第1回の見学団は高等科1年生を対象とすることが記されているが、1921年2月19日付『満日』の社説では、第2回の見学団は「関東州内高等小学校及び満鉄沿線各地小学校高等科及び尋常男生徒現在五六年高等一年生」を対象とすることが示されている。この点については、その後の毎年度の見学団に関する記事において詳しく記載されていないが、ほぼ同様であると推測される。

また、1886年、文部大臣森有礼により小学校令が公布された。小学校が尋常小学校（修業年限4年）と高等小学校（修業年限4年）の2段階とし、尋常小学校の修業年限が義務教育期間となる。1907年、小学校令の一部の改正により、修業年限が6年に延長された。それにより、高等小学校の旧1・2年を尋常小学校5・6年とし、高等小学校の旧3・4年を高等小学校の新1・2年とした。入学年齢が、尋常小学校は6歳、高等小学校は12歳であることから見れば、参加者の児童たちの年齢は、11～13歳であると推測できる。

36）参加児童は第1回50名、第2回70名、第3回108名、第4回80名、第5回90名、第6回94名で、総計492名に及ぶ。

37）阿部安成「大陸に興奮する修学旅行―山口高等商業学校がゆく＜満韓支＞＜鮮満支＞」『旅遊中国21』（29））風媒社、2008年；有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館、2002年；高媛「戦地から観光地へ―日露戦争前後の＜満洲＞旅行」『中国21』（29）風媒社、2008年；同「戦勝が生み出した観光―日露戦争翌年における満洲修学旅行」『ジャーナル･オブ･グローバル･メディア･スタディーズ』（7）駒沢大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、2010年；白幡洋三郎『旅行ノススメ―昭和が生んだ庶民の「新文化」』中央公論社、1996年；長志珠絵「＜満州＞ツーリズムと学校・帝国空間・戦場―女子高等師範学校の『大陸旅行』記録を中心に」駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂、2007年；李良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」『北東アジア研究』（13）島根県立大学北東アジア地域研究センター、2007年などが挙げられる。

38）野村章、磯田一雄「＜満洲＞在住日本人子弟の教育と教科書」『成城文芸』（126）成城大学、1989年。

39）磯田一雄「在満日本人教育におけるアイデンティティー論―＜満州郷土論＞の意味を中心に」『東アジア研究』（45）大阪経済法科大学アジア研究所、2006年。

40）大森直樹「＜満洲国＞教育と日本人」『地方史研究』43（6）地方史研究協議会、1993年；木下竹次「新満洲に於ける日本人の教育」『学習研究』11（5）奈良女子大学、1932年。

41）千住一「軍政期南洋群島における統治政策の初期展開と第2回内地観光団」『日本植民地研究』（17）日本植民地研究会、2005年；同「軍政期日本統治下南洋群島における内地観光団」『立教観光学研究紀要』（10）立教大学院観光学研究科、2008年；同「南洋群島における内地観光団をめぐる＜内的心情＞」『日本植民地研究』（25）日本植民地研究会、2013年；同「委任統治期南洋群島における内地観光団」（1928–1930年）『奈良県立大学研究季報』24（1）奈良県立大学、2013年。

42）曽山毅は「日本統治期台湾における修学旅行の展開―『台湾日日新報』を中心に」（『観光学評論』（1-2）観光学術学会、2013年）において、日本統治期台湾における国語学校の内地修学旅行について触れたが、その参加者のほとんどが台湾人生徒であり、日本人の母国見学とは異なっている。

43）注22を参照。

44）1920年2月6日付『満日』社告。

45）「第二回在満学童母国見学の一大快挙」1921年2月19日付『満日』。

46）「第三回在満小学生徒母国見学の一大壮挙」1922年1月26日付『満日』。

47）「我社の第五回母国見学団　桜花爛漫の母国に満洲を代表して行く小国民見学団」1924年1月31日付『満日』。

48）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A13100594500（第2-5画像目）、「帝都復興ニ関スル詔書」（国立公文書館）。

49）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A13100594600（第2-4画像目）、「国民精神作興ニ

関スル詔書」（国立公文書館）。
50）佐田弘治郎『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』南満洲鉄道株式会社、1928年。1140–1141頁。
51）「広く浅いよりは狭くとも深き観察を」1920年2月4日付『満日』。なお、本稿では欠損などにより原記載が判読できない場合、■印で示し、推定される欠損字数分または適当な字数の空白を括って表示した。以下同じ。
52）「知識よりも情意方面の陶冶を　我社の母国見学団」1920年2月15日付『満日』。
53）「母国見学団員に望む」1922年2月28日付『満日』。
54）「学童母国見学に関する希望　旅行によつて得る効果　所謂百聞は一見に如かず　発育盛りの児童が内地見学によつて智識の蔵を拓くを喜ぶ」1921年2月26日付『満日』。
55）「保護者より植民地の児童に　祖国の美風を感銘させ度い　第三回児童見学団に対する希望」1922年3月8日付『満日』。
56）「満鉄教育沿革史」、前掲書、1213–1224頁。
57）「第三回母国見学団　参加学童割当極る」1922年2月17日付『満日』。
58）「満鉄教育沿革史」、前掲書、1118頁。
59）第1回目は見学団団長を置かなかった。満日社は新聞営業部長・石橋文三郎を見学団幹事として派遣した。
60）1921年2月19日付『満日』社告。
61）「第三回在満学生母国見学団観光日程極る」1922年2月15日付『満日』。
62）「母国見学団の歌（あゝ玉盃の譜）」1921年3月25日付『満日』。第2回の見学団の歌は、作詞者は不明であり曲名も付けられていない。内容に関しては、第2回目の団歌は18節、第3回、4回目はそれぞれ3節からなっている。旋律は旧制第一高等学校の寮歌「あゝ玉杯に花うけて」のものを使っている。第3回目の団歌の曲名は「東洋平和に捧げんと」と名付けられ、旋律は最初は前回と同じように「あゝ玉杯に花受けて」と決定されたが、後に軍歌「橘中佐」のものに変更することとなった。第4回目になると、曲名と旋律は第3回目と同じである。
63）「朝鮮から母国から歓迎するとの知らせ　団長も成り団歌も出来た　出発アト十日に迫る　団員の興味は平和博へ」1922年3月4日付『満日』。第4回の団歌は、第3回とほぼ同じであるが、第2節に「上野を飾る平和博」から「舊（むかし）を語る鎌倉宮」へと変更した。第4回目の団歌はその後の2回でも継続して使用された。
64）団章は盾形で、中央に丸型の模様を嵌め込み、周囲を植物の模様で囲んだものである。身分によって団章の色が分けられ、団員は赤、付添教員は青、衛生班は黄、また満日社員は紫となっている。
65）「我社の学童母国見学団出発す」1920年3月20日付『満日』。
66）同上。
67）「花咲き鳥謳ふ　懐かしの母国へ」1921年3月26日付『満日』。
68）河西秀哉『皇居の近現代史―開かれた皇室像の誕生』吉川弘文、2015年、18–19頁。
69）大日本帝国議会誌刊行会『大日本帝国議会誌』第11巻、969頁。
70）河西秀哉、前掲書、21–22頁。
71）同上、33頁。
72）「宮城拝観願ひ」1923年2月13日付『朝日新聞』。
73）「小学生の宮城拝観　いよいよ許可　四月一ぱいに」1923年3月31日付『朝日新聞』。
74）同上。
75）「小学生の宮城拝観は全国的に許可　宮内省と文部省とが協議中」1923年3月22日付『朝日新聞』。
76）「宮城拝観の特典を与へらる」1923年3月18日付、「宮城拝観　正式許可　我社主催第四回母国見学団の光栄　国民教育上一新紀元を画する最大の感激」1923年3月21日付『満日』。
77）「宮城拝観　正式許可　我社主催第四回母国見学団の光栄　国民教育上一新紀元を画する最大の感激」1923年3月21日付『満日』。
78）「皇室と人民と接触の第一歩　母国見学団宮城拝観の許可は教育上大慶」1923年3月21日付『満日』。
79）「敬虔に打たれた　拝観の思ひ出　岐津視学の講話」1923年3月21日付『満日』。
80）「保護者として真に感謝に堪えぬ　千田次郎氏の談」1923年3月21日付『満日』。
81）「満日晴れの今朝八時　第四回母国見学団出発」1923年3月16日付『満日』。
82）「第三回在満小学児童母国見学だより」1922年3月23日付『満日』。
83）「母国を見学した児童の感想」1922年4月11日付『満日』。
84）同上。
85）「我社主催　母国見学　第十三信（大阪の通信池内特派員）」1924年3月24日付『満日』。
86）「京城の見学振り　偶発的鮮満対抗野球　試合に半島球界の幕開き」1923年3月22日付『満日』。
87）「第四回母国見学団だより」1923年3月27日付『満日』。

88）田島龍夫『野球使用』愛知県立第一中学校校友会、1905年、20頁。
89）（財）全日本軟式野球連盟50年史編集委員会『財団法人全日本軟式野球連盟50年史』（財）全日本軟式野球連盟、1995年、3頁。
90）川西玲子『戦前外地の高校野球―台湾・朝鮮・満洲に花開いた球児たちの夢』彩流社、2014年、82頁。
91）同上、86–94頁を参照。
92）1911年9月16日付『東京日日新聞』。
93）塚瀬進、前掲書、176–177頁。
94）同上、186頁。
95）原田順一「日本内地見学記」三井兵治『朋友』新進堂、1922年、140–157頁。
96）「我社の母国見学団　学童見学準備成る　生徒附添参加者決定　内外各方面の好意と便宜」1920年3月13日、「第三小学見学報告会　土産品の展覧」1923年4月13日、「我社主催の小学生母国見学団　希望者が多数なので公平に抽籤で決定する」1924年2月20日付『満日』。
97）1925年4月5日付『満日』社告。
98）曽山毅「日本統治期台湾における修学旅行の展開―『台湾日日新報』を中心に」『観光学評論』（1-2）観光学術学会、2013年、190頁。
99）塚瀬進、前掲書、120頁。
100）柳沢遊『日本人の植民地経験　大連日本人商工業者の歴史』青木書店、1999年、332頁。
101）同上、172頁。
102）塚瀬進、前掲書、125頁。
103）「第二回在満学童母国見学の一大快挙」1921年2月19日付『満日』。

Activities Organized by Newspaper Companies in the Concession City of Dalian:

Focusing on Field Trips by Manchuria-born Japanese Students Visiting Mainland Japan Organized by the Japanese Newspaper Company in Manchuria

RONG Yuan

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),
School of Cultural and Social Studies,
Department of Japanese Studies

This paper focuses on field trips to mainland Japan by groups of Manchuria-born Japanese students (*Zaiman Jidō Bokoku Kengakudan* 在満児童母国見学団, lit. 'Group of children resident in Manchuria visiting their mother country). They were organized by the *Manshū Nichinichi Shimbun* 満洲日日新聞 (lit. 'Japanese Newspaper Company of Manchuria') in the twentieth century. While examining articles published by this newspaper company, I depict the field trips themselves, as well as their background and achievements. I also examine how this newspaper company played a part in the colonial policy of Manchuria. This eventually contributed to imperial Japan's broader Asian policy. The paper attempts to investigate the significance of activities organized by newspaper companies in colonies.

Key words: Manchuria-born Japanese students, organized visits to mainland Japan, *Manshū Nichinichi Shimbun*, *Manshū Nichinichi Shimbun* Company, activities organized by newspaper Companies, Concession City Dalian